特集●すべての道はローマに通ず

ネット社会に出現する教育システムの変化とは
－ローマにその原点を見る

藤沢久美*

Change of Education System in the Net Society
－Viewing Origins from Rome－

Kumi FUJISAWA*

＊シンクタンク・ソフィアバンク副代表、社会起業家フォーラム副代表、金融審議会委員　Vice President of Thinktank SophiaBank, Vice President of Japan Social Entrepreneur Forum
原稿受理　2004年5月21日
成熟化・情報化社会における消費行動の変化に伴って生まれる新たな産業構造、市場のあり方を研究するとともに、その社会創造の担い手を育てるべく、子どもから大人までの金融経済教育、起業家教育を積極的に展開している。

1．ローマの教育システムが予感させるもの

塩野七生氏の『ローマ人の物語第Ｘ巻』に記されたローマの教育システムの変化は、情報革命によってインターネットが起こすであろう21世紀の教育システム変化の方向性を予感させる。なぜ、過去の懐かしいローマの物語が、未来の進化の物語につながっていくのか。それは、ヘーゲルの弁証法を思い起こすからである。ヘーゲルは、歴史の進歩をあたかも螺旋階段を上るようだと語っている。螺旋階段を上る人を横から見れば、それは上がっていくように見える。しかし、それを改めて上から見ると、原点に戻っているかに見える。

カサエルが創り上げたインフラの原点は、ローマに向かって、ヒト・モノ・カネの流れを作ることであった。そして、それらの流れに必ず付随して流れるもの、それは情報である。一方、現在、我々が直面している情報流通の革命は、情報流通の向上を発端として、ヒト・モノ・カネの流れが大きく変化をし始めた。現代とローマのインフラ革命は、ともに同じ原点上に立つといえるだろう。さらに、その新たなインフラに立つ社会におけるカサエルの教育政策は、「オープン化」という性質をもつ。これもまた、我々が現代において、新たな教育システムを考える上で、原点といえる。

このように、歴史の進化は、ある意味、原点回帰するかに見えるが、実は、螺旋階段を上るかのごとく、進化しているのである。

そこで、『ローマ人の物語第Ｘ巻』の記述をもとに、ローマの教育システムの特徴を次の四つのポイントに絞り、原点回帰を試みながら、21世紀に訪れるであろう教育システムの未来進化の姿を探ってみたい。

●ローマの教育システムの四つの特徴
１）すべての人に教育の機会を与える
２）教師に自由な競争を与える
３）すべての学校を私塾にする
４）コミュニケーション能力を強化する

2．すべての人に教育の機会を与える

教師にローマ市民権を与えることによって、アテネなどの他地域から、知を携えた人間を教師として誘致し、生活水準に関係なく、すべての人に教育の機会を与えるというローマでの取り組みは、今、インターネットの世界でも起こりつつある。しかも、それは、より徹底的な形で進められている。

近代教育もまた、多くの人が教育の機会を得られるシステムであるといわれたが、そこには、時間と空間の呪縛があった。教師のいる場所に、決められた時間に行くことができる者だけしか、教育を受けることができない。

しかし、インターネットによって、我々は、その呪縛から解き放たれることになった。誰もが、どこにいても、ネットを通じて、いろんな知識や智恵を得ることができるようになった。しかも、ブロードバンドによって、文字だけの情報ではなく、動画による、よりきめ細かな知識や智恵の伝達も可能になっていく。

さらに、ローマですでにその片鱗がみられるように、教育そのものが未来進化によって、「教え育て

る」から「学び習う」学習になっていく。このように、インターネットは教育的カリキュラムを大きく変えてしまい、教育は、受動的なものから、学びたいときに学べるという能動的なものに変わっていくだろう。そして、さらに、インターネットそのものが壮大なナレッジベースとして、学びの場を提供することになるだろう。

インターネットは、ローマ時代に起きた教育システムの変化を、今、もう一度さらに大きなスケールでその現象を繰り返そうとしているといえるだろう。

３．教師に自由な競争を与える

ローマにおいて、教師は教材も教育方法も、授業料も自由であった。わが国においても、教育が進化しつつあるが、ローマのこの特徴もまた大変示唆的である。現在、わが国では、独立行政法人化という動きをとりながら、ある意味、教育の世界に競争を導入しようとしている。しかし、独立行政法人による競争は、教育システムの進化の過程においては、まだ序曲に過ぎない。これは、教育改革に、まださほど大きなインパクトを与える動きにはなっていない。

本当のインパクトとは、ブロードバンドによるｅラーニングの革命だ。すでに述べたとおり、現在の教育は、学生にとって、時間と空間という制約のなかに存在する。この制約は裏返せば、教師にとって安泰な世界を提供していることになる。たとえば、一つのキャンパスで一つの教科を担当する教師にとって、そのキャンパスに集まる学生は、自動的にその教師の下に集まる仕組みとなっているからだ。

しかし、ブロードバンドによる授業が可能になるとき、もはや、キャンパスは制限ではなくなる。他の学校に優秀な教師がいれば、その授業をｅラーニングによって受けることが可能になるうえに、いずれ、そのようなｅラーニングによる受講も受講単位として認められる時代はそう遠くないと思われる。

そうなると、面白くかつ有益な授業の情報は、ネットを通じてあっという間に広がり、その教師の元に、大半の生徒が集まることになるだろう。インターネットは、自然に、教師を自由競争の世界へと誘い、教師が時間や空間といった制約によって、そこに集まる生徒を独占することはできなくなる。これは、教育の世界に、大変な競争を生み出すだろう。そして、そこで起きるのは、“Winner takes all.”。優れた教師が多くの学生を獲得していく。

しかし、これは、決して嘆くべきことではない。この変化は、無風状態であったために水準が高まらなかった教育の世界に、きわめて大きな質の向上を促すに違いない。

４．すべての学校が私塾となる

ローマにおける私塾を中心とした学校のあり方もまた、21世紀の学校の姿を洞察させる。

近代における学校教育では、教える側が、生徒に対し、知識の切り売りを行ってきた。専門性のもとに、教師が自分の専門を定め、細やかに定義された言葉で得た知識をいかに効率的に伝えるかばかりを考えてきた。

その結果、起きたことは、本来「知」というものが、一つの生態系のようなシステムを持っていたにもかかわらず、そのなかの形式的な知識だけが伝達されるようになってしまった

本来の教育の場とは、現場での実践やそこで得た暗黙知など智恵の部分も含めて伝達されるものである。そして、そのような教育を行った時代がわが国にもあった。それが、私塾であり、本来そういうものを目指していた。

たとえば、私塾で、政治を学ぶときは、政治の世界で活動している人間の暗黙知や体系的な智恵や長く生きた人間の深みのある言葉などを通じて、全体性をもって学ぶシステムが存在した。そして、それは全人的な教育に常につながっていた。

ところが、近代教育が専門性という垣根のなかに入り、カリキュラムという枠組みのなかで行われるようになった結果、教師の役割が、変わってしまった。つまり、全人的な教育でもなく、暗黙知を伝えることでもなく、自らが体験でつかんだわけではなく、紙に書かれた知識として学んだ知識を生徒に伝達する単なる知識伝達者に陥ってしまった。

このような近代教育のあり方による弊害を感じ始めた現代の社会において、「私塾」というシステムが再び注目され始めている。この流れは、かつてローマでそうであったように、全人的な教育をなしうる力を持ち、暗黙知や体験を持った人間の周りに多くの学生が集まり、知識だけではなく全人的な共感や智恵を学び伝達する時代に向かっていくであろうことを示している。

つまり、これからの教育は、私塾に原点回帰していくだろう。その本質は、一人の優れた、個性的な知の体系を持った個人から、全体性をもって、さま

ざまな知識や智恵を学んでいく教育システムに原点回帰していくということだ。なぜなら、近代教育システムの中で伝達されてきた知識、いわゆる智恵から切り離された知識や人間性から切り離された知識が、もはや力を持たないということは、この20世紀後半に、我々が大きな壁に直面して実感したことであるからだ。

5．コミュニケーション能力を強化する

ローマでは、現代の中学校、高校にあたる学校で、自分の意思を正確に伝える技術、聞かせる技術を修得させたという。これもまた、我々が教育によって、何を身につけるべきかの洞察を与えてくれる。

その理由は、電子メールの急速な普及によって、かつて電話で話していたことを文章で書くようになったという現象にある。電子メールは、文（ふみ）の文化の復活ともいわれるが、伝えたい意思を、具体的に文章にすることで、人は、理性的かつ分析的に文章を見つめるようになり、それによって、深く何かを訴える力が磨かれることになる。

想いや智恵をメールで伝えることが、日常となったことで、かつての電話ではできなかったコミュニケーション能力の強化が行われることとなった。

しかも、その能力をさらに強化してくれるのが、ネットにおけるコミュニティ一の存在だ。コミュニティでは、「１：多」や「多：多」といった関係において、 面識のない人間に対して情報を発信したり、智恵を借りるためにメッセージを送ったりすることになる。これは、単なる友人へのメッセージの送り方では成しえない。特に、面識のない人から、智恵を借りるような場としてコミュニティを捉えるとすれば、そこには、コミュニケーションのための修練の場が与えられているといえる。

そして、まもなくやってくるブロードバンド社会では、文章に加えて自由に映像も送ることが可能になる。そうなると、対面の場で必要な身振り手振りといったものを用いた、より高度な意思伝達の技術を身につける機会を得ることになり、さらにコミュニケーション能力は高めることになるだろう

6．まとめ

以上に述べたとおり、これから教育システムには、インターネットという新しいインフラの登場により、未来進化と原点回帰が起こるだろう。そして、それは、『ローマ人の物語第Ｘ巻』の教育についての記述において共感した五つのポイントが、今後の教育システムの進化の骨格になっていくと考える。

ただ、改めて述べたいのは、決して、これは原点回帰だけではないということだ。未来進化の部分がどのように、進化を牽引していくのかを見落としてはいけない。しかし、それは、過去の歴史を紐解いただけではまだ見えないことが多々ある。なぜならば、未来進化のある部分は、過去の歴史のなかでは実現し得なかった事象が大きく影響するからである。

たとえば、ｅラーニングの登場は、今までの課題ごとに同一カリキュラムを用い、同一進捗、同一学年によって行われてきた近代教育において、個人の進捗度合いに応じた教育を可能にする。これは、かつてわが国にあった寺子屋システムの復活ともいえる。ｅラーニングは、教育を受けることができる人間の数に限界があった時代と大多数の人間が教育を受ける時代の両者の特徴を取り込んで進化の姿を描き出す。

いずれにしても、教育の世界にとどまらず、それ以外の様々な世界において、多くの原点回帰が起こると思われる。

しかし、未来は単に古きよき時代に戻るだけではない。一体、何が螺旋階段を一段上に押し上げていくのか。それは、インターネットによって可能になったグローバル教育システムなのか、それとも、かつてなしえなかった異文化の交流を教育のなかに取り込むことなのか。もしかすると、コミュニティがそのまま教育の場になるという、これもまた未来進化の姿かもしれない。

インターネットというハードのインフラがどのようなソフトのインフラを生み出すか。ヘーゲルの螺旋階段を上るかのごとく起こる原点回帰をローマの歴史が予感させてくれる。

では、ネット革命のなかで、ローマ時代よりももっと急速に、そして大規模に進化を遂げていく教育システムの未来進化の姿は、どこにあるのか。

それは、我々の創造力のなかにあるのだろう。